

「20 歳代若者にも支援拡大を ヤングケアラー支援で濱島淑恵氏提言」

子どもが家族の介護や世話をせざるを得ないヤングケアラーが急に大きな社会問題になっている中、この問題に早くから取り組んでいる濱島淑恵大阪歯科大学教授が6月4日、日本記者クラブで記者会見（オンライン形式）し、支援対象を20歳代の若者にも広げるなど支援策のさらなる強化を訴えた。記者会見には、3人のヤングケアラーも参加、相談する人たちがいない中でどのような生活を強いられたか、切実な体験と社会に対して抱く思いなどを語った。



濱島淑恵大阪歯科大学教授（テレビ会議システム ZOOM 画面から）

家族の世話続ける高校生 5%

濱島氏は、これまで2016年に大阪府立高校10校、2018年に埼玉県立高校11校を対象にヤングケアラーの実態調査を実施している。その結果、高校生の約5%がヤングケアラーで、介護、世話をしているのは母、祖母のほか祖父、弟妹とさまざまであることが分かった。父母の場合は、病気や身体障がいが必要な理由で、母親の場合は精神疾患、父親の場合は依存傾向のある人も多い。祖父母の場合は、病気のほかに高齢のため介護が必要、あるいは認知症が理由となっている。弟妹は幼いことのほか、障がいを持つためケアが欠かされないケースもある。外国籍のヤングケアラーも大阪府で11例、埼玉県で13例あった。「実際にはもっと多い可能性がある」と、より大規模な実態調査の必要を濱島氏は提言した。

ケアの具体的な様子はどうか。家事、感情面のサポート、外出や買い物の付き添い、見守り、弟妹の世話、身体介護、医療的ケア。これらを挙げ、日常的から専門的までケアの内容は多様であることに濱島氏は注意を促した。毎日家事をすることは子どもにとっては時間がかかることで、大人以上に負担が大きい。感情的サポートや見守りも長時間の緊張を強いられるため同様に負担は大きい。時には親の余命を親より先に知ってしまうことなどもあり、重い責任も負わされる。こうした現実を紹介し、子どもたちが行っているケアという行為が「決して軽視できないものであることを認識する必要がある」ことを、濱島氏は強調した。

学校生活への影響深刻

ケアの頻度については、ほぼ毎日が約半数。ケアにかかる時間は短時間のケースが大半だが、1割前後は長時間のケアを余儀なくされている。約4割は小学生の時からケアを経験している。当然、さまざまな問題が生じており、まず遅刻、欠席、宿題忘れ、成績不振などから、学校が楽しくなってしまう。自身の心身の健康状態にも影響を生じる場合もある。さらに友人と話が合わず、クラブ活動でトラブルになるといった友人関係の希薄さ、孤立・孤独に陥る影響の深刻さを濱島氏は強調した。

一方、こうした体験をすることでヤングケアラーたちが得るものも多く、その頑張りは評価されるべきだ、と濱島氏は指摘している。障がいや疾病に対する理解や、家族との絆、誇りが深まり、さらにさまざまなことを段取りよくこなす生活スキルを身につけるといったことだ。とはいえ、ケアに伴う負担や困難が生涯にわたって及ぼす影響は重大であることを重ねて強調し、ヤングケアラーに対する社会の理解と支援を濱島氏は強く訴えた

ようやくプロジェクトチーム設置

ヤングケアラーに関しては、最近まで大きな問題として議論されることはなかった。厚生労働省と文部科学省の副大臣を共同議長とする「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム」が設置されたのはようやく今年3月のこと。4回にわたる会合を経て、5月17日に報告書を公表している。悩み相談を行う地方自治体の事業支援を検討することや、福祉・介護・医療・教育関係機関、専門職やボランティアなどが研修を受け、学ぶ機会を増やす、といった今後の取り組みが盛り込まれている。

濱島氏は、こうした政府の取り組みが始まったことを評価する一方、「制度的裏付けがないのが残念。安定的、継続的なものとするには制度の中に位置づけ、責任の主体を明確にすべきだ」と指摘した。高校生以下の問題とせず、家族に対するケアと就職活動などが重なってしまう20代の若者にまで支援を広げる必要も強調している。さらに、ヤングケアラーの問題の背景にケアを要する人々への支援が十分ではない制度的不備があることに注意

を促し、こうした対策がとられないとヤングケアラー問題の解決はないことも強く訴えた。

記者会見には、ヤングケアラー3人も参加し、それぞれ自身の体験を語った。その中の一人である高岡里衣さんは、指定難病である多発性筋炎を患う母親のケアを9歳から始め、母親が2019年に亡くなるまで24年続けた。「なんとかできることはしなければ」という思いだけで必死に毎日を過ごしてきた、と長い年月を振り返り、わかりやすい相談窓口の設置とアクセスしやすい環境づくりなどを社会に求めた。

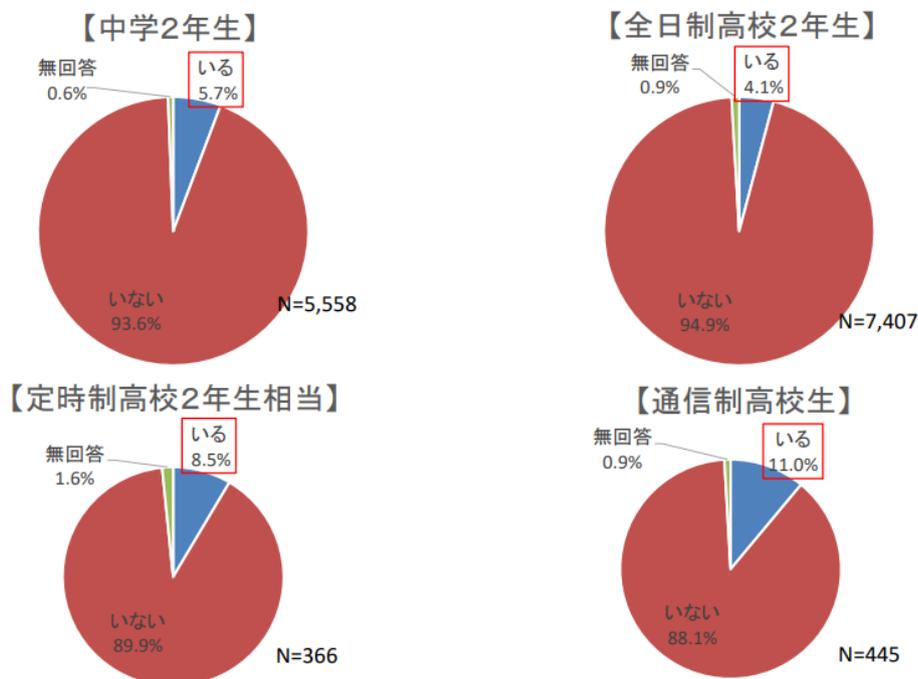
1割以上が平日7時間以上ケア

ヤングケアラーに関する国による実態調査も長い間行われてなかったが、全国の公立中学・高校(定時制、通信制も含む)1,444校を対象に昨年12月から実施したアンケート調査(回答校1,065校、回収率約74%)と、各校に在籍する中学2年生、高校生(全日制2年生、定時制2年生相当、通信制は学年区別なし)計約1万3,800人から得たウェブ調査結果が、4月に公表されている。それによるとヤングケアラーがいると答えた学校は、中学校で46.6%、全日制高校で49.8%、定時制高校で70.4%、通信制高校で60.0%に上った。

中高生に対するウェブ調査結果からは、世話をしている家族が「いる」と回答したのは中学2年生で5.7%、全日制高校2年生で4.1%、定時制高校2年生相当で8.5%、通信制高校生で11.0%となっている。「世話をしている家族がいる」と答えた生徒のうち最も多いのは「きょうだい」で、中学2年生では61.8%、全日制高校2年生で44.3%。理由は「幼い」ためが7割以上を占めるが、「身体障がい」あるいは「知的障がい」を挙げた生徒も中学2年生で20.3%、全日制高校2年生で14.7%いた。

中高生調査結果①

- 中高生に対し、世話をしている家族の有無について質問。
- 世話をしている家族が「いる」と回答したのは中学2年生で5.7%、全日制高校2年生で4.1%、定時制高校2年生相当で8.5%、通信制高校生で11.0%。



(厚生労働省「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム 第2回会議資料『ヤングケアラーの実態に関する調査研究について』」から)

「父母」を世話しているのは、中学2年生で23.5%、全日制高校2年生で29.6%となっている。理由として最も多いのは「身体障がい」(同20.0%、15.4%)で、「精神疾患、依存症(疑い含む)」が次いで多い(同17.3%、14.3%)。世話の内容は「家事(食事の準備や掃除、洗濯)」が最も多かった(同73.3%、68.1%)。「祖父母」を世話している中高生も「父母」に次いで多く「(同14.7%、22.5%)、理由としては「高齢」が最も多かった(同80.9%、76.8%)。

平日1日あたり世話に費やす時間はどのくらいか。7時間以上が中学2年生で11.7%、全日制高校2年生で10.7%、3~7時間もそれぞれ21.9%、24.4%となっている。家族の世話をしていることを誰かに相談したことがあると答えた中学2年生は21.6%、全日制高校2年生は23.5%しかいなかった。

日文 小岩井忠道(科学記者)

関連サイト

日本記者クラブ会見レポート「『ヤングケアラー その実態と課題』濱島淑恵・大阪歯科大学教授」

[「ヤングケアラー その実態と課題」濱島淑恵・大阪歯科大学教授 | 日本記者クラブ JapanNationalPressClub \(JNPC\)](#)

同「YouTube 会見動画」[「You239」](#)[「ヤングケアラー その実態と課題」濱島淑恵・大阪歯科大学教授 2021.6.4 - YouTube](#)

「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の 連携プロジェクトチーム報告」

[000780549.pdf \(mhlw.go.jp\)](#)